

コラム：流出か流通か

戦争や災害などで本来あるべき場所から流出し、不当に売買される文化財が後を絶たないという話は、古くからある。近年、一般に広く知られているのは、中東地域などでの戦争による博物館や遺跡からの資料の破壊と略奪であろう。破壊と略奪は一連の行為ではあるが、前者が価値の文化的相対性を一切認めない行為であるのに対して、後者は経済的価値については認めているという点で微妙な違いがあるのかもしれない。経済的価値を認めるとは、要するにそれを元手にした不当な売買の容認の事である。流出文化財に対する国際的な活動動向については、ブルーシールド国際委員会 (International Committee of the Blue Shield: ICBS) や、日本ではかつて平山郁夫が行った文化財赤十字構想等があるが、文化財の流出は決してこうした国際的な問題だけではない点を強調しなければならない。

足下の我が国では人口減少・少子高齢化による縮退社会を迎え、空き家の増加や集落の消失が相次ぎ、さらに大規模災害が追い打ちをかけるかのように人々の生活を否応なく変えている。かつては生活とともにあった文化財も、人知れず朽ちていくだけではなく、何らかの経済的価値を見出されて流出していく事例が全国で後を絶たない。

和歌山県立博物館の大河内智之は、和歌山県内で相次ぐ寺院での盗難と被害の実態、現状での対策・課題について訴えている (大河内 2018abc, p.130-135・p.148-153・p.148-153)。同県で発生した平成 22 年からの 1 年間で 60 件もの連続盗難、平成 29 年から 30 年春にかけての連続盗難のいずれもがそれぞれ一人の窃盗犯によるもので、無住になったり車が入りやすかったり等比較的盗難しやすい所が目を付けられて犯行に及んでいると言う。また、幸運にも流通の過程で関係者や専門家の目に留まり取り戻されたとしても、仏像等の写真や採寸等のデータが採られていないために被害地域住民には一体どれが地元の仏様なのか判別がつかない状態が発生するという問題も取り上げている。

文化財の流出が相次ぐ側面には、筆者の住む宮崎県内で戦前の昭和恐慌時に相次いだ古墳の盗掘のように景気の好不況のみならず、第 2 次大戦直後にそれまで抑圧されていた「我々の歴史」を知ろうとする国民の知的好奇心から行なわれた私的な「調査」によって流出してしまったように、いくつかの要因が挙げられよう。また、これらが流通する背景には、これらを財産として、または知識として蓄積したいと考える人々 (時に我々研究者でもある) の存在があるのだろう。

インターネットオークションの登場は、これまで価値が見失われていた対象にも経済的価値が存在するのだという事を、多くの人々が認識する上で重要な契機であったと言っても過言ではないのかもしれない。従来あまり人に知られずに、特殊な対象に辿り着く事が出来た研究者や蒐集家のみが知っていた文化財が、思いついたキーワード検索でその存在が特定できるようになっていった。そしてこのシステムが一方では文化財の流出を促進し、また一方ではこれらをストックしようとする層の裾野を拡張しているのではないかと考えている。数十年前には「古い物」でしかなかった対象は、ある時期から歴史的価値や審美的価値を見出され、拡大したコレクターの所有へとつながっていった。この意味で、< 誰も管理出来ない状況にあるのならば、壊されるよりも流出して誰かが遺してくれる方がまし > というたまに聞く皮肉も、まんざらではないのだと思ひ浮かべる。

しかし、問題がある。資料は一括性がある事によって意味や重要性が見いだせ、価値が生ずる場合が多い。ところが、どうやらインターネットオークションはこの一括性の解体を促進してしまう傾向に拍車がかかってしまった。一方、ばら売りにしてはじめての設定単価を下げる事によって、これまで敷居の高った古物市場への参入障壁を低くしているという逆説的な効果もあろう。古物趣味、広く歴史・文化へ関心を持つ人が多くなる事は文化財に関わる専門家の望む所でもある訳だが、この事がかえって文化財の散逸化を拡大してしまっている。こうしたジレンマの行きつく先、というか紆余曲折ありながらも最終的に文化財の辿り着く先が博物館の収蔵庫であるのなら幸運だが、公的機関の現状を考えるとそれも難しくなっている。数年前に、ある仏教系大学の博物館を見学した際、宗派の寺院が無住・廃寺になった場合に仏像等を引き取る事を想定した専用の収蔵庫に案内して頂いた事があったが、こうした例は限られているだろう。

昭和に活躍した文芸批評家の保田與重郎は、「廢佛毀釋偶感」の中でこう懐述する。

「昭和改元頃、大和の國原の中の道を歩いてみると、増尼のみない荒れ寺が、大小あちこちにあつた。その中の一つに院政期ごろの佛像がずらりと並んでゐた、倒れかかつた小堂をのぞくと鎌倉足利といつたころの佛たち

が、無造作にすすけてみて、それでも近ごろ香花を供へたあとがある。全く夢のやうな気がしたと、十年餘り以前なくなつた京のあるお茶屋の老嫗は語つた。昭和改元頃では、少なくとも天平佛といはねば、大和では見向かなかつた。これも奇怪な流行観念であつた。しかしこの二三年前、京都市内の山中の廢寺へゆくと、弘仁風の佛の體軀がころがってゐて、他にも二三首も手もない佛體があつた。以前から住職のなり手をさがしてゐるがといつてゐた。」(保田 1988,p.330)^(註)

保田は同じ文章の中で、「廢佛毀釋が強く行はれたのは、局地的で(中略)、全国的に廣く強い行動だつたわけでない」と言っている(同 p.323)。保田の時代と現代とはもちろん廢仏毀釈そのものへ研究の深化や、仏像、廣く仏教美術そのものへの価値解釈が異なる訳だが、価値の轉換はいつの時代にも起こり得るものであつて、その中で時代に淘汰されたり・遺されてきたものがある。いつの時代にも、「まもる」事のジレンマや価値の再解釈は生じている。

恐らく保田の時代には見出されなかつたであろう「美」や廣く社会的な存在価値が見出されているのが現代であるが、少なくとも「まもる」活動自体が新しい価値の生成というダイナミズムにつながっているのは確かである。

註

「廢佛毀釋偶感」のオリジナルは 1973 年 3 月の『芸術新潮』24-3 p.89-91。この号では廢仏毀釈が特集され、保田以外にも由水常雄・丸山尚一・景山春樹・菅原明朗・村岡空といった研究者・芸術家・批評家・宗教家が執筆している。

参考文献

- 大河内智之 2018a 「和歌山県の事例から考える防犯対策 1 近年の仏像盗難被害の現状」『大法輪』85-7 大法輪閣
- 大河内智之 2018b 「和歌山県の事例から考える防犯対策 2 帰れない仏像、帰ってきた仏像」『大法輪』85-8 大法輪閣
- 大河内智之 2018c 「和歌山県の事例から考える防犯対策 3 仏像を盗難被害に遭わせないために」『大法輪』85-9 大法輪閣
- 保田與重郎 1988 「廢佛毀釋偶感」『保田與重郎全集』第 38 卷 講談社

(山内 利秋)